



## 有名なジャーナルがCOP10に行動を促す

輝かしい受賞実績を持つ京都発の国際季刊誌Kyoto Journalは、今月行われる国連の生物多様性サミットで、地球上の生命を守るためには人類が果敢な行動を実行すべきと各国の代表者たちに訴えることを目的として、「生物多様性」というテーマの画期的な特集号を発行した。

地球上の生物的多様性保全について話し合われる国連会議COP10が、日本の名古屋において10月18日から29日まで開かれる。このCOP10は重要なイベントである。なぜなら、今、ホモサピエンスというたった1つの種が、地球上の数え切れない仲間の種を存続させるか全滅させるかを決断する岐路に立たされているからである。毎日、100種もの生物種が地球上から永遠にその姿を消している。その多くは生息地を失ってしまったことや人類がもたらした気候変動が原因で消滅しているのである。

Kyoto Journalは、COP10サミットを行動への呼びかけであると理解し、企業の利害が絡みすでに不均衡なものとなっているこの対話の場に多様な声を反映させる機会であると捉えた。その結果、生物多様性の損失への創造的解決法に確実な示唆を与えるために、質の高い執筆と鮮やかなデザインで構成されたこの特集号が完成されたのである。このKyoto Journal 第75号は、里山(何世代に渡って、人々が農地で生き物の多様性を損なうことなく、守りながらあるいは促進さえしながら暮らしてきた田園地帯)を通して日本の生物多様性保全の実態を紹介するだけに留まらず、世界中のそれぞれの土地で生物多様性を維持するために熱心に活動している随筆家、詩人、写真家、芸術家、科学者、実業家の声をも紹介している。Kyoto Journalは、新しい生物多様性戦略計画を採用することになるCOP10に出席する代表者たちに、このジャーナルを配布する予定である。

「私たちは名古屋へ短時間でアクセスできる京都という場所に住んでいるのだから、自らCOP10で何らかの役割を果たすべきであると1年近く前に確認した。」と、創刊者である編集者のジョン・アイナセンは言う。「この惑星は、臨界点に近づいている。私たち人類の種の運命は、この地球の繊細で希薄な生物圏の健康状態とその生物圏を共有する他の種の存続と切り離すことはできない。」アイナセンは、1986年に、非営利で、すべての仕事がボランティアで行われるこのKyoto Journalを立ち上げた。記述内容とデザイン性の両方の素晴らしさで賞賛されるKyoto Journalは、何十カ国もの国に定期購読者をもつ、日本で最も長く継続している英語の自主出版物の1つである。日本の古都である京都に拠点を置くKyoto Journalの使命は、アジアのさまざまな文化に対するより深い理解と認識を培うことである。Kyoto Journalにとってアジアは大きな庭であり、そして、「生物多様性」を特集したこのジャーナルは世界を廻るのである。

「私たち編集者は、科学者でもなければ、政治家や何か特別なグループに所属している者でもない。」と、彼自身Kyoto Journalのアートディレクターを務めるアイナセンは語る。「他の多くの人たちと同様、単なる普通の地球市民である私たちがCOP10に出席する代表者たちに心から願うことは、この大切な地球上の生物の多様性を、手遅れになってしまう前に保全すべくあるいは改善すべく果敢で意義深い政策を組み立てるために必要な、良心、勇気、ビジョンを抱いてほしいということである。」

この生物多様性特集号は、COP10代表者たちの努力に対する私たちの心を込めた支援の表現である。世界中の人々が彼らの成功を期待しているということをぜひ彼らに知ってもらいたい。そして、ここに集められたさまざまな声は、「センス・オブ・ワンダー」を通しての知識や示唆を提供するものである。たとえば、国連会議で豊かな経験を持つ、長期間日本を拠点にジャーナリストとして活動していたエリック・ジョンストンがこの75号のために特別に書き下ろした記事は、このような大規模な会議の力学や、陥りやすい過ち、成功への秘訣について、丹念に掘り下げた内容となっている。もう1つ特筆すべきものは、プロジェクト・センサード賞を受賞したジャーナリスト、W. デイビッド・クビアックの記事である。彼は、コーポリズム(企業中心主義)という

病気に対する地球の免疫反応としての環境活動家たちが地球に貢献できることとその理由を説明している。彼らは、この惑星を癒し、人類のこの惑星に対する統治の仕方を生命が根本的に必要としているものと再び結び合わせようとしていると語っている。

## 科学者、芸術家、活動家、作家、スピリチュアルリーダーたち

Kyoto Journalは、1つのセクションを用いて、COP10での最大の懸念事項を世界の人々と共有する機会をつくるために、生物多様性についての簡潔な500単語エッセイを募集した。その反響は圧倒されるものであった。最終的に、70人以上の投稿者のエッセイが選ばれ、印刷版あるいはオンライン版に掲載されている。投稿者の1人、マサチューセッツの高校生、サム・レビンは、学生菜園を共同で立ち上げ、現在、彼の校区の3軒のカフェテリアすべてに食物を供給している。有名なフランス人ジャーナリストで、プロデューサー、映画監督でもあるクリア・ノビアンは、「オーシャンサイド」(海洋殺戮)という新語を造り出した。スクリップス海洋科学研究所の理論学者である、ジョージ・スギハラは、自然の線形的なモデル(思考)がなぜ真実に合わないのかについて説明している。日本の先住民族アイヌの語り部、ユウキコウジは、ファクト(知識)だけでは不十分であると主張する。認知されている分類学者のケンティン・ウィラーは、概算1000万の地球上に存在する種を発見し、記述しようとしている。先駆的環境アーティストである、ヘレン・メイヤー・ハリソンとニュートン・ハリソンは、10カ国何十億の人々に飲み水を供給しているチベット高原の氷河に与える地球温暖化の壊滅的影響を防ぐ方法について述べている。野外生物学者のサム・ステアは、「バイオミクリ」(自然を模倣した工学や設計)がどのように私たちの生活を改善できるのかについて語っている。その他、著名な自然作家たちである、バリー・ロベス、キャロライン・フレイザー、トーマス・ベリー、ゲーリー・スナイダー、ピーター・マシスン、C.W. ニコル、ビル・マックキベンのエッセイも紹介しており、また、名高い動物写真家のアンドリュー・ズッカマン、海中写真家のウェイン・レビン、自然世界画家のイザベラ・カーランド、海草アーティストのノダミチコ、禅老師のスーザン・マーフィー、神道宮司のウエダマサキ、環境経済学者のパバン・スクデフ、Resurgenceの編集者で作家のサティッシュ・クマー、そして、Kyoto Journalの常連執筆者である詩人のロバート・ブレイディも書いている。

## 里山を知る

Kyoto Journal第75号のフルタイトルは、「生物多様性：日本の里山と人類が共有する未来」である。なぜ、そのようなタイトルをつけたのか？それは、国連がCOP10会議を名古屋で開くことを決定して以来、日本政府や日本の多くの企業は、日本の環境型農業の伝統的実践である「里山」の概念を都合よく利用してきたからである。彼らの努力の一部は確かに誠実なものであるが、他のものは、単なる表面的な里山の美化バージョンであり、国連会議において自分たちのプロジェクトや製品の促進するための隠された企業アジェンダを後押しするものである。長い間日本という国を観察してきた、私たちKyoto Journalの編集者たちは、その里山の概念を理想化するのではなく、生物多様性保全の真の可能性を示すべく、バランス感覚のある深い洞察に基づいたレポートを提供することが肝要であると理解している。キット・タケナガの美しい写真を用いたこの22ページに渡る里山セクションは、特別チームによって手がけられた。チームメンバーは、日本の環境ジャーナリストのウィングフレッド・バード、自ら30年間里山に住み続ける著名な画家であり環境活動家でもあるブライアン・ウィリアムズ、京都大学地球環境学の準教授であるジェーン・シンガーとKyoto Journalのベテランメンバーで副編集長のスチュワート・ワックスである。

印刷版を補完するという意味で、Kyoto Journalは、30以上のオンライン用記事を掲載したウェブエディション( HYPER-LINK "<http://www.kyotojournal.org/biodiversity/>" <http://www.kyotojournal.org/biodiversity/>)を制作した。画像のすべてがPDFファイルで無料ダウンロード可能である。たとえば、ジャレッド・ブレイターマンは、フィクションキャラクターのトトロが住むような環境を創造することで本来の東京を復活させる方法について、ミドリ・パクストンは、UNDPという組織

# KYOTO

Journal

が気候変動に直面するエコシステムを守るために使っている戦略について語っている。また、ジェイムズ・ウッドは、シードバンクについて、リチャード・マーフィーは、私たちが、原子、遺伝子アルファベット、そして運命を共有することの意味は、すべての存在する有機体が1つの家族だからであるという理由について述べ、ジェン・デル・ライは、どのようにして魚を捕るときと同じ創意工夫を魚の存在を維持するために使えばよいのかについて、クララ・シノブ・イウラは、なぜ古来の土着の知恵が危機に瀕する古代の熱帯雨林を救えるのかについて、そして、デイビッド・イングは、ポケモンのようなフィロモンというゲームが、驚きいっぱいの交換カードを使って世界の多様な生き物や植物について子どもたちに教えることができることについて、それぞれ説明している。



Red-vein-darter dragonfly, photograph by Martin Amm

Kyoto Journalのスポンサーは、京都に本部を置く、日本の書道を促進するための教育機関である平安文化センターである。

今回の特集号のチーフ編集者はスチュワート・ワックスが務め、デザインはジョン・アイナーセンが担当した。COP10代表者とメディア用に名古屋市内とその周辺で見られる生物多様性の場所を示す差込みガイドは、Kyoto Journalのインターンであるカミバヤシタツヤによって作成された。

COP10におけるKyoto Journal記者会見：10月18日(月)午後5時から5時半  
国際会議室(ルーム3f)第3ビルディング

連絡先：

ジョン・アイナーセン、Kyoto Journal創立編集者およびアートディレクタ

Phone: +81(0)75-761-1433 / 090-9459-6303 Email: [feedback@kyotojournal.org](mailto:feedback@kyotojournal.org)

Stewart Wachs, Kyoto Journal副編集長および「生物多様性」特集号のチーフ編集者

Mobile phone: +81(0)80-3130-5600 Email: [editors@kyotojournal.org](mailto:editors@kyotojournal.org)

Kyoto Journal Website: <http://www.kyotojournal.org/>

「生命の貴重さと差し迫った危うさを扱ったこの特集号のために提供された、豊富なアイデア、知識、美、そして真の驚きに鼓舞されることによって、COP10の参加者たちが地球のために(また、私たち自身の種の最良の利益のために)行動を起こしてくれることを、そして、現在の悲劇的な絶滅数に対する効果的な対策を念入りに導き出してくれることを願っています。」——ケン・ロジャーズ、Kyoto Journal 編集長

添付資料：

赤縞模様ダートトンボ、マーティン・アム撮影

Kyoto Journal 第75号表紙